



生誕180周年

NHK 大河ドラマ「青天を衝け」放送記念

「時代の変革者 渋沢栄一の半生」

最終回：合本組織と道徳経済合一説（論語と算盤）編

ぶぎん地域経済研究所 取締役 研究主幹 松本 博之
(公益財団法人 渋沢栄一記念財団維持会員)

本連載もいよいよ最終回となった。今回は栄一が晩年（古希から後）に説き始めた「論語と算盤」、そこから発展させた道徳経済合一説を中心に彼が目指した社会を考察し、筆を置くこととしたい。

さて栄一が生涯をかけて唱道し、実践したことが2つある。本連載でも紹介した「官尊民卑の打破」と「商工業の隆盛」である。彼はこれらを実現させるためには、「合本組織」を使うことが最も良い方法であり、合本組織を正當に機能させるためには道理に基づいて実践しなければならないとした。そして、その道理というものを幼少の頃より慣れ親しんだ「論語」としたのである。そして道徳的なよりどころである「論語」とそれと経済活動である「算盤」を一体化したことで始まった彼の考え方「論語と算盤」は、後に「道徳経済合一説」へと発展していった。

I 合本組織編

50 合本組織とは何なのか

合本組織とは、どのような組織を意図して栄一は言っているのだろうか？ 現代では一般的には

合本組織≒株式会社として紹介していることが多く見受けられる。不特定多数の人々から出資を得るという点では似ているが、その実は全く似て異なるものであることが分かる。

「合本」という言葉、まさに多様な資本を集めることではあるが、栄一が考えた合本組織をどのように表現できるのだろうか。次のようになる。

合本組織＝「公益を追求するという使命や目的を達成するために、最も適した人材と資本を集め事業を推進させるという考え方（組織）」とされている。

そして、合本組織には3つの要素が必要であるとされている。

■ 設立目的（ミッション）

合本組織の使命は国の利益、すなわち公益を増加させることである。従って株主や経営者は、まず公益の増進という意識を持ち、会社設立の目的や使命を十分理解して投資し、経営することが求められる。であるので合本組織の形態は会社の目的を達成するために適した組織であれば良いと考えた。

栄一の考えとしては、必ずしも株式会社でなくとも良く、小規模の個人ビジネスであれば合名会社でも良いし、業種によっては合資会社を勧めて設立に携わった。株式会社という形態は、栄一が考える合本組織の中の選択肢の一つに過ぎなかった。

■ 人材とネットワーク

次に栄一が重視したのが経営者や事業活動に従事する人材だった。特に経営者は会社の使命や目的をよく理解し、公益を追求する人でなければならないと考えていた。

栄一は自分が設立に関与した企業であっても、企業にふさわしい経営者を探して、眼鏡にかなった経営者に任せた。また人材の育成についても、彼が望んだ人材やネットワークを形成するためという考えもあって東京高等商業学校（現一橋大学）や各地の商業学校の設立や経営に深く関わった。一般的な資本主義と大きく異なるのは、人材育成に重きを置いていることでもある。

■ 資本

合本組織を普及するためには、潤沢な資本が必要であるとした。そのために栄一が最も力を入れたのが銀行制度構築であった。

栄一はそのシンボルとしての第一国立銀行の設立を主導し、自ら第一国立銀行の頭取を長年務めるなかで、全国の国立銀行の設立にも支援している。銀行というのは地域経済や産業の発展には不可欠であるとの信念に支えられていた。

51 栄一と合本組織との出会い

栄一が合本組織なるものと出会ったのは、徳川幕府パリ万博使節団の一員としてフランスに赴き、

滞欧中のことである。

栄一はフランスで“株式”なるものを体験した。昭武の欧州留学の費用を捻出するために、勧められて政府公債と鉄道社債を購入した。後年、栄一は「此時に成る程公債と云ふものは経済上便利なものであるという感想を強くしました」と語っている。

その後、思いもよらぬ幕府瓦解から明治維新によって僅か1年半という短い滞在での無念の帰国をした栄一は、徳川慶喜が移り住んでいた駿府（静岡市）で、余生を過ごすことを決心し、血洗島村より妻子を呼び寄せ暮らし始める。

その時に明治新政府より全国の各藩に合計5,000万両が強制的に貸し付けられた。栄一は静岡藩の53万両の使い道について建言する。この資金を藩の一般財源とは別会計として、合本組織なるものを作って藩の財政を潤そうと試すのであった。この「静岡商法会所」という商社と銀行の機能を兼ね備えた組織は、大成功し大きな利潤を藩にもたらすのだった。そして栄一が創案し、実務責任者である頭取として運営したこの合本組織こそが、現在では「我が国最初の株式会社」と言われるものとなった。

52 合本組織にこだわった栄一

栄一を紹介する時の枕詞に「日本資本主義経済の父」がある。株式会社を中心とする会社制度は栄一が中心となってつくり上げ、栄一が定着させたものであり、日本における資本主義の発展の最大の功労者であるという評価を得ていることは、今更言うまでもない。

しかしながら、面白い説がある。“栄一は資本主義という言葉が好きではなかった”という複数の渋沢栄一研究者の説である。日本において「株

式会社」、「資本主義」という言葉が一般的に用いられるようになってからも栄一は「合本組織」や「合本主義」という言葉を頻繁に用い続けたということや、経済のネガティブな面を語る時に「資本主義」という言葉を使ったというのだ。世間の状況と比較してみれば不自然なほど合本組織（合本主義）という言葉を使っていたという説である。筆者の推察であるが、栄一が唱道した合本組織（合本主義）の内容と、当時広がっていた株式会社、資本主義というものの違いを栄一本人が敏感に感じとっていたのではないだろうか。

栄一が唱道した合本組織は、冒頭部分には「公益を追求するという使命や目的を達成するため……」とある。このことから、栄一が目ざしとした実業界の実態において、果たして合本組織といえる会社が見られないということもあり、「自分の唱える合本組織や合本主義は、君たちがやっている株式会社や資本主義とは決定的に違いがあり、そもそも似て非なるものなんだよ」と暗に言いたかったのではないかとはいえよう。

栄一が目指していた合本組織による会社制度は、より大きな資本活動を行うという経済的な合理性のみを追求するシステムにとどまるものではなかったのである。

利益の独占をしてはならない

「商売は共同的でなければならない～（略）共同的にやらなければ此世の中は進むものではない」

（龍門雑誌 第 385 号）

「故人（栄一）は、零細の金を集めて衆と共に事業を起こそうという主義でありました」

（龍門雑誌 第 519 号）

「（栄一は）衆人の合資協力による株式会社、合資会社などを起こして利益は一人で壟断せず、衆

人と共に其の恩恵を均霑するようしてきた」

（伝記資料 別巻第六）

また以上のような考え方から、財閥やそれに匹敵するような巨大企業（独占企業）は、当然、栄一には認められなかった。（第7回掲載、「隅田川船中大論争」で栄一が語っている）

日本の主要産業の設立に指導的な役割をして官界や財界にもカリスマとして多大な影響力をもっていた栄一が、財閥形成を目指したならば、三井や三菱を凌ぐ財閥が出来ていたことは難しくなかったであろうと多くの専門家が言っている。しかしながら、栄一はそれをしないで、様々な産業への他社参入を許していったのは、共同的に行い利益を広く配分するという考え方があったからだった。

II 論語と算盤編

53 栄一と論語の出会い

「論語」は全ての人に共通する実用的な教訓

次に栄一と論語との出会いから見てみたい。教育熱心だった父の市郎右衛門より6歳から、7歳から従兄の尾高惇忠から10年間、「論語」を始め四書五経や史記、日本外史等を学ぶ。1873(明治6)年5月、大蔵省を辞職して、民間での経済活動に従事しようとした時に、「わたしは「論語」で一生を貫いてみせる。金銭を取り扱うことが、なぜ賤しいのだ。君のように金銭を賤しんでいては、国家は立ち行かない。民間よりも官の方が貴いとか、爵位が高いといったことは、実はそんなに尊いことではない。人間が勤めるべき尊い仕事は至るところにある。官だけが尊いわけではない。」と同省の同僚たちに言って退職した。

栄一は『論語』は、最も欠点が少ない人生の教訓である。また全ての人に共有する実施的な教訓である」と言っている。

栄一は、学者が「論語」の研究をするように考証的に読まない。孔子の言葉を日常生活での実地に置き換えて「論語」を読んだ。熟読玩味して、その精神面を実行していく。また論語では学問と実践は極めて密着したものである。

論語を語らず、しばらく実践の日々

栄一は後年、「論語と算盤」について「この説を自らの信条とし、さらに他人に対しても、その信条を述べたのははるか以前からだった。」「自分は政治も経済もそれが仁義、道徳と如何なる場合にも一致するものでなければならぬと思っている。これは自分が50年前よりの信念であって……」と言っているが、栄一がこの説を“商業道徳”として語り始めたのが、明治30年代からで、精力的に唱え始めたのは、実は実業界を引退した頃からである。

論語を規範にして、事業に当たっていた栄一は、この間、実業界で粉骨砕身の活動をしていた時期は、積極的に商業道徳や、道徳と経済の一致についてほとんど口にしていない。言葉より体現ということだったのだろうと推察できる。

54 「論語と算盤」の誕生から 「道徳経済合一説」の発展へ

それは、一冊の画帳から始まった

栄一が古希を迎えた時に、書画帖を送られる。この中に洋画家小山正太郎氏が画いた“論語と算盤”“シルクハットと朱鞘の刀”が描かれた画があった。この時栄一とは長い交友関係にあり、彼が師

とも慕う三島中州が絵の意味を質問したのであった。そこで栄一は「このシルクハットの礼帽と護身の剣は一見反対の不調和ながら熱視すれば調和するものであり、また論語と算盤も同じくして道徳と経済とが相依り、相扶けて初めて世の中のためになるという意味を示すのです」と説明した。

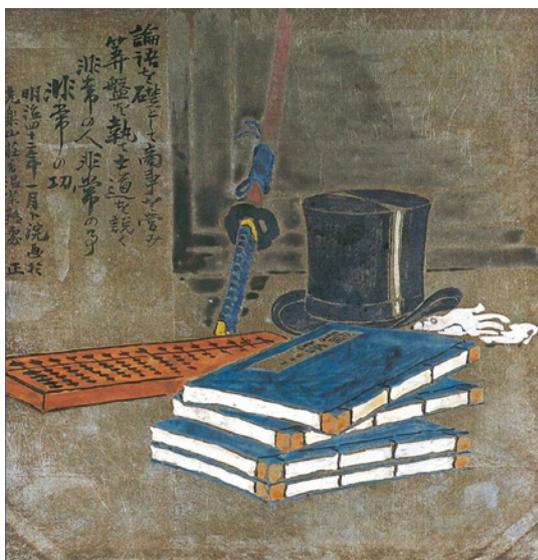
三島はこれを聞いて、拍手をし「これは妙だ」と称賛し、「題論語算盤図賀」という一文を作って栄一に贈った。これ以来、栄一は「論語と算盤」と題した文章を各誌に寄せるようになった。これが「論語と算盤」誕生の詳細である。

三島中州とは

この三島中州（1830～1919）という人物について紹介したい。栄一より10歳年上の幕末から大正期の著名な漢学者である。備中国（現在の岡山県倉敷市）に生まれ、10代で山田方谷ほうこくに陽明学を学び、その後伊勢の斎藤拙堂、昌平黉で佐藤一斎らと当時の著名な学者に師事している。新政府に1872(明治5)年司法官となり、1877(明治10)年に漢学塾二松学舎を創設し、漢学や東洋学の発展に尽力した。また、東京帝国大学教授、東宮侍講や宮中顧問などを歴任した。

栄一との交遊は、共通の知人を介して1880～81(明治13～14)年に知り合い、栄一の先妻ちよの墓碑の撰文を依頼するなどして交遊を深めていく。栄一は三島が経営する二松学舎（現二松学舎大学）の舎長を務めるなど積極的に支援をしていった。

交遊の中で、三島が発表した「義理合一説」は栄一の宿志、日頃から実行しているところと一致することから、栄一は三島を師と仰ぐようになるのだった。



論語と算盤 小山正太郎画
(渋沢史料館所蔵)

55 「論語と算盤」の時代背景

論語と算盤、そこから発展した道徳経済合一説について、どのような時代背景の中で、発表されたのか考察する。多くの研究者の論によれば、基本型である論語と算盤説と道徳経済合一説は、日露戦争（1904～1905年）から第一次世界大戦（1914～1918年）までの間に確立されたとされている。栄一が自らの実業界での経験に基づいて、論語と算盤と道徳経済合一説を中心とする経済道徳思想を語り始めた時期は、主として実業界引退をしてからであると言われている。

時代背景となった要因を挙げると、以下の通りである。日露戦争後の日本社会にはびこる金銭尊重、個人重視の風潮から栄一ら知識人が若者に向けていろいろと説いた時代となった。

- ・日露戦争で大国ロシアに勝利したことによる国家独立の達成感
- ・個人重視の考え方の台頭
- ・第一次世界大戦によるバブル景気による「成金」と金銭尊重の風潮
- ・企業家による投機的な経済行動の横行
- ・第一次世界大戦後の経済不況と労農運動の激化

以上の時代背景にして、実業界の重鎮である栄一の説は、多くの人の賛同を得ていくのであった。必ず合一すべきであると確信し、生涯をかけて唱道し続けた。道徳経済合一説の背景には、「論語」があることは折にふれて述べている。

栄一は、終生道徳経済合一説による啓蒙活動と実践に従事した。この道徳経済合一説は、当時の実業界、マスコミ、学会などで広く引用され、一般の人々にも広く知られて、栄一思想の中核となり、現在に至るまで栄一を語るときや、栄一研究がなされるときに分析に使われる。

56 道徳経済合一説の唱道と合本組織の実践

孔子の論語をもとに、「論語と算盤」から「道徳経済合一説」に発展させていったことは既に述べた。では道徳経済合一説では、栄一はどんなことを言っているのか。彼の講演や文書に残されているわけだが、2つを紹介してみよう。

□道徳と経済とは両者共に進めていくべきもので、生産殖利（経済）は仁義道徳（道徳）に依って発展し得られるもの、仁義道徳は経済によって拡大するものである。

道徳・経済合一論（「実業公論」4月号）

□若し道徳経済が単に自己を利して、単にその身を修めるだけに止まるならば、其の効果たるや甚だ少ない。博く民に施して而して能く衆を済ふと云うに至って、初めて廣大無辺となる。而して廣く済ふには経済が伴わなければならぬ、良い組織は経済が伴わなければならぬ、而して折角の良い方案も道徳に依りて始めて成立するものである。即ち、道徳と経済とは合一すべきものであって分離すべきものではない。

（龍門雑誌 第419号 11頁）

「論語と算盤」から「道德経済合一説」への発展の歴史

年	摘	要
明治 10～20 年代	漢学者三島中州と交流し、三島が提唱する「義理合一論」の影響を受ける	
1909 年	明治 42	古希に際して画帳を贈られ、三島中州より「 題論語算盤図賀 」の一文を贈られる
1911 年	明治 44	東京大学宇野教授より月 1～2 回ペースで論語の個人教授を受ける（～1917 年まで）
1912 年	明治 45	「青洲百話」を出版
”	”	有識者 40 人を集めた意見交換の場、帰一協会を組織
1914 年	大正 3	同協会にて、「仁義道德というものと生産殖利というものは全然一致すべきものである」論理を呈上 3 回の議論を経て、栄一の考えを肯定する考えが示され、大いに力づく 「 論語と算盤 」から 抽象性を高めた道德経済一致（合一）を認めさせた
1915 年	大正 4	雑誌「実業之世界」へコラム掲載を開始（～1922 年まで）→ 論語講義の元原稿
1916 年	大正 5	竜門社総会で「道德と経済の合一」をテーマに演説を行い、 確信を強める
”	”	冊子「 論語と算盤 」を出版
1923 年	大正 12	道德経済合一を説く講話（渋沢栄一記念館のアンドロイドの演説）
1925 年	大正 14	「論語講義」を発刊（渋沢栄一の儒学倫理の集大成）→ 儒学倫理に基づき、「論語と算盤」を原型とした「 道德経済合一説 」を強調する内容

（ぶぎん地域経済研究所作成）

また「道德と経済は本質的に一致するものと言っても、自ずと一致するものではない。必ず一致させるように努めなければならない。一致させるには、一致させるべきその人にそれだけの十分な覚悟、平素の用心がなければならない。」と道德と経済は自ずから自然と一致するのでなく、当事者の覚悟と日頃からの心がけが必要であること、「道德経済合一説の主眼は道德にあって、経済にあるのではない。」と経済に対する道德の優位性とも言っている。

「経済は道德を具現する社会の構築のための不可欠な手段であり、必ず合一すべきものである」と確信して唱道し、合本組織を通して実践していったのだ。栄一が唱えた道德経済合一説は、今で言うならば、国民全体のさらには、世界中の人々の福祉の充実・向上を目的とする説と考えてもよいであろう。

栄一のいう生産殖利（経済）は、「御互に日常必要なる物を殖やし、財を生ずる」ものであって、「国家国民の利便幸福ということを目的として」経営されるものである。従って単純に事業や商売を指

すものではない。それらの目的に沿う、広い意味での経済活動をさせている。

「世界人類の利便と幸福を増進する意義目的の下に行われなければならない」

「経済」（生産殖利）を道德的手段で行えば足り、その結果、構築される社会がどのようなものになっても関心がない、かまわないという考え方とは全く異なる思想である。

栄一の考える「経済」は国民の生活、すなわち衣食住を充実させるための富を作り出すものである。栄一のいう「道德」は国民の生活、すなわち衣食住を充実させることを主たる目的の一つとすることが明らかである。

欠くべからざるものとして「実践」

「実践敢行する人でなければ未だ道德を解せる人とは言われない」と栄一は何より実践を重んじた人であった。これらのことは、栄一の経済界での活動の理念およびその理念に基づいた行動とともに根本的なところで一致する。

合本組織と道徳経済合一説を語る栄一

私は学問の浅く不勉強ですので、実行できることも微力ではありますが、ただ、道徳と経済とは、全く合一するものであるということを確認しております。私が行なう事業においてもこれを証明していると思っております。

これは決して今日になって言い出したことではありません。自分の思いが、正しい国家の隆盛を望むならば、国を富ますということに努めなければなりません。そして、国を富ますためには科学を進め、商工業の活動も進めていかなくてはなりません。

そこで、商工業を進めるためにはどうしても「合本組織」いわゆる株式会社の組織が必要です。そして株式会社の組織をもって会社を経営するには、完全にして強固なる道理によって行われなければなりません。そして、道理によるならば、その基準は何なるかと申しますと、これは孔子の「論語」による外はないのです。

道徳経済合一説：大正12年「帝国発明協会における演説」抜粋

57 「道徳経済合一説」への大いなる誤解

「道徳と経済のバランス」という誤解

大河ドラマ「青天を衝け」放送開始以来、著名なビジネスマンや大企業の経営者が渋沢栄一や論語と算盤について語るテレビ番組を見る機会が増えた。その中で危惧されることがある。それは道徳経済合一説への誤解である。彼らが語る「道徳と経済のバランスをとることの大切さ」、「ビジネスにおける道徳論」といったものである。

栄一自身は道徳経済合一説の考え方について数えきれないほどの発言を残しているが、実務家であり学者や研究者ではない栄一は道徳経済合一説についての論文や学説的な文章を著していない。またその理念を体系的に我々にも示していない。

栄一は、確かに道徳の行き過ぎや、また一方で

経済の行き過ぎも戒めた。経済活動は卑しいと考える従来の道徳、倫理を無視した利潤追求も戒めている。この栄一の論が道徳と経済のバランスと表現、理解されていることが多い。また栄一が特に事業経営者相手に話す機会が多かったため、それを表面的に読むならば、そのように解釈を許すような話し方をしている、という研究者があるのを見ることができる。

ましてや残っている講演録などについても、当然のこと分かり易く説明するため、聴衆によって言い方を変えるようなところもあり、明確な理解が必ずしも共有されていないと指摘されているのも事実である。

以上により、我々、現代人の道徳経済合一説への大いなる誤解につながっている要因とも考えられる。

重要な「合一」の理解

道徳経済合一説の理解には「合一」という言葉をどう理解するかが重要になる。因みに「合一」とは広辞苑によると「合して一つになること」「一つに合わせること」となっている。栄一が論じるように道徳と経済は、まさに両者は一致して不可分である。一つであるということから、当然のごとくそこには「バランス」という考えはない。バランスとは、道徳と経済が別物、異質なものであるとの前提、別物だからバランスが必要だという理解になっていると言えるだろう。

先述の企業経営者のように、現代人は道徳も経済もまさに異質なものと考えているから、両者の折り合いをつけるためにバランスが必要だと考える。繰り返しとなるが、栄一は道徳と経済はバランスさせるべき二つの別々のものでないと論じている。一方がなければ他方はなりたたない。相互に不可欠なものである。道徳と経済は表裏一体で

あるという話となる。

以上のように、道徳経済合一説は道徳と経済が一見相反するようになって見えても本質的に一致するものである、ということをも明言した。「合一」という言葉をおろそかにすると、道徳経済合一説の本質を見失うおそれがある。

58 真の富とは「道徳も一致する正しい富」

栄一の道徳経済合一説は、彼の経済分野での基本原理にとどまらず、社会事業活動をも支えた基本原理だった。また彼が語った合本組織の主要公益（国益）主義が内在していると言ってよい。

彼は道徳経済合一説による「真の富」について
□「富」というものは、道徳も一致するということ
でなければ正しい富、真正なる富ということ
は言えない。

□真正の道理によって富を維持し、それによって
堅実な国家たらしむようにならなければならない。

□仮に自分自身の力で財産が出来たところで、そ
れは真の富ということが出来ない。社会一般の
人の進歩を図り、社会一般の事業が進んで初め
て、真の富となる。（富豪のあるべき姿）

と言っている。

最後に、日本資本主義経済の父として、現在で
いう「経済成長」をどのようにとらえていたのか
を紹介する。

栄一は経済成長を「国富膨張」という言葉を使っ
ている。「国富膨張」という、その国富とは必ずし
も貨幣もしくは「富」のみを指すものではない。
身近な例を以てすれば、行燈が洋燈となって、更に
ガス燈より電気燈となり、昔は夜に入れば戸外一点
の投影をみざりしものが、軒提灯よりランプ瓦斯電
燈に進む、不夜城の観を呈するもの、是即ち膨張な
り、生活程度の高まれるのが国富である。（大正7
年の講演より 竜門雑誌第360号24~25頁）

◆連載の終わりに

連載の終わりに、一言申し述べたい。振
り返ると、本格的な準備を開始したのが、
2020年2月中旬で、初回の原稿を書き始
めたのは3か月後のGWからだったと記憶
している。以後、合計9回、全71ページ
の掲載を終えることができた。

些か残念なのは、日の目を見なかった数
十ページの原稿だ。毎回決められたペー
ジ内で収めることは、欲張りな筆者には難
しい作業だった。もっと皆さんに伝えたい
ことがたくさんあった。それだけ栄一翁の
人生は91年と長いだけでなく、多岐にわたり
且つ密度の濃いものだと言っても良い。

この連載が進み、我が家の書棚に栄一
翁の関連書籍が増えるにつれて、私の“渋
沢栄一”という新たな友への理解は進んで
いったと思う。しかしながら、まだまだ不
十分だ。

今後は、栄一翁と私の“Chapter II”に
向かって、取組んでいきたいと思う。お読
みいただきありがとうございました。



渋沢栄一史料館（東京都北区）

渋沢栄一記念館（埼玉県深谷市）

深谷市渋沢栄一政策推進部（埼玉県深谷市）

常設展示図録：2000年渋沢史料館編

渋沢栄一を知る事典：公益財団法人渋沢栄一記念財団編 2012年東京堂出版

青淵回顧録（前・後）：小貴修一郎編著 1927年青淵回顧録刊行会

論語講義：渋沢栄一述 1994（復刻版）明德出版社

青淵百話：渋沢栄一著 1912年同文館

渋沢栄一 100の訓言：渋沢健著 2010年日経ビジネス文庫

渋沢栄一訓言集：渋沢栄一著 1919年富之日本社

雨夜譚 渋沢栄一自伝：竜門社編 1984年岩波書店

経済と道徳：渋沢栄一口述、小貴修一郎編 1939年渋沢翁頌徳会

新装版澁澤栄一：澁澤秀雄著 2019年時事通信社

渋沢栄一 近代の創造：山本七平著 2009年祥伝社

現代語訳渋沢栄一伝：守屋淳編訳 2012年平凡社

現代語訳論語と算盤：守屋淳訳 2010年筑摩書房

渋沢栄一：木村昌人著 2020年筑摩書房

渋沢栄一日本の経営哲学を確立した男：山本七平著 2018年さくら舎-

公益の追求者・渋沢栄一：渋沢研究会著 1999年山川出版社

グローバル資本主義の中の渋沢栄一：橋川武郎編著 2014年東洋経済新報社

渋沢栄一 青淵論叢：鹿島茂編訳 2020年講談社文庫

原点で読む 渋沢栄一のメッセージ：島田昌和編 2014年岩波書店

渋沢栄一の福祉思想：大谷まこと著 2011年ミネルヴァ書房

評伝日本の経済思想 渋沢栄一：見城梯治著 2008年日本経済評論社

人物叢書渋沢栄一：土屋喬雄著 1989年吉川弘文館

渋沢栄一伝：幸田露伴著 1939年岩波書店

激流 渋沢栄一の若き日：大佛次郎著 2009年未知谷

渋沢栄一 92年の生涯（春の巻、夏の巻、秋の巻、冬の巻）：白石喜太郎著 2020,21年国書刊行会

岩崎弥太郎と渋沢栄一：渋沢雅英著 2012年公益財団法人渋沢栄一記念財団

歴史的視野の中の渋沢栄一：渋沢雅英著 2007年公益財団法人渋沢栄一記念財団

若き日の渋沢栄一：新井慎一著 2014年深谷ててて編集局

日本を創った12人（後）：堺屋太一著 1997年PHP研究所

渋沢栄一 社会実業家の先駆者：島田昌和著 2011年岩波新書

渋沢栄一：木村昌人著 1991年中公新書

渋沢家三代：佐野真一著 1998年文春新書

渋沢栄一の経世済民思想：坂本慎一著 2002年日本経済評論社

渋沢栄一伝：井上潤著 2020年ミネルヴァ書房

渋沢栄一：宮本又郎編著 2016年PHP研究所

雄気堂々（上・下）：城山三郎著 1976年新潮文庫

渋沢栄一（算盤編・論語編）：鹿島茂著 2013年文春文庫

渋沢栄一：童門冬二 1998年人物文庫

小説渋沢栄一 虹を見ていた：津本陽著 2004年NHK出版

渋沢栄一の生涯：2020年宝島社

渋沢栄一 この国を変える力「歴史街道」：2021年PHP

日本の資本主義を作った男 渋沢栄一：2019年宝島社

渋沢栄一「サンエイムック」：2021年株式会社三栄

渋沢栄一 天命を楽しんで事を成す：2021年「別冊太陽」平凡社

渋沢栄一が駆け抜けた明治という時代：2021年トランヴェール JR 東日本

渋沢研究：第7号 1994年10月、第11号 1998年10月、第24号 2012年1月